

## 骨董品化への懸念

木村 洋

日本近代文学研究は、「三四郎」論のような題の精読主義論文（單一の作品を扱うもの）で満ちあふれている。その多くは対象の作家に関心がない人にとって面白味がない、閉鎖的な分析に陥っている。この状況が続くかぎり、文学研究はますます人々の関心を引き付ける力を弱め、骨董品化するのではないかと心配してしまった。

けれども精読主義論文でありながら、広く学者たちの関心に訴えかける論文もある。森鷗外「舞姫」を論じる多田蔵人「言葉をなくした男」（『日本近代文学』二〇二一年一月）はその筆頭である。ここでは卓越した言語能力の持ち主が言語的啓蒙に失敗する物語として「舞姫」が捉えられる。これは精読主義論文ながら、明治文体史論でもあり、日本と西洋の文化的対話を再現する試みでもある。優れた考証力と高密度の思索のためにそうなるのだろう。かつて易しい論文ではないが、最近の論文のなかでいちばん心を昂ぶらせてくれた。

精読に励みながら広い射程を持つ点は、福井拓也「久保田万太郎「末枯」とノスタイルー」（『国語と国文学』二〇二一年三月）にもあってはまる。これは落語界の動きを復元しながら当作品のノスタイルーの仕組みを解説する。老練な文と行き届いた分析が光っている。

らよく見かけるようになった。この現在至上主義と言うべき視野のなかで、しばしば過去は単純化されている。過去の資料が教えるように、近代において文学史は政治中心主義や保守派の思想に抗する嘗みとしてあつたし、弱者や少数民族に目を向ける文学史も少なくない。「暴力」という精度を欠いた言葉を投げかける前に、そうした過去の実態に向き合うことが学問の仕事ではないか。

その傍らで次々と力のこもった文学史が書かれている。宋哈「平安朝文人論」（東京大学出版会、二〇二一年）、山本嘉孝「詩文と経世」（名古屋大学出版会、二〇二一年）がこの例である。近代の分野でも兵藤裕己「物語の近代」（岩波書店、二〇二〇年）が出た。前近代と近代の物語行為の違い、「平家物語」の公共的な語りの主体、泉鏡花の奇妙な推敲過程などの話題が思索を誘う。時間（古代から近代まで）と空間（文学史、芸能史、思想史、社会史など）を俯瞰する視野を持ち、理論的にして実証的で、しかも上質の文で綴られた本を、いittaiこの著者以外の誰が書けるだろうか。

今橋映子「近代日本の美術思想」（白水社、二〇二一年）はA5判二段組、上下巻合わせて約一六三〇頁の本である。美術評論家の岩村透の足どりを追うのだが、森鷗外、自然主義、政府による自由主義文化人の抑圧などにも話は及ぶ。一人の文化人をきちんと論じることがどういうことを示している。明治後期、大正初期の文化を考えるうえで必読の本だろう。

阿部公彦「病んだ言葉癪やす言葉生きる言葉」（青土社、二〇二一年）には、「森鷗外と事務能力」「漱石の食事法」のように、意表を笑いた視点からの分析が並んでいる。表現の細部に宿る、言い表しがたい微妙な表情を巧みに言語化してみせる腕前に感心した。と

佐藤貴之「喜劇の作者になること」（『日本文学』二〇二〇年一二月）では、中村光夫が「笑ひ」「喜劇」という言葉を手がかりにしながら、独自の分析枠組みを作り上げていく様子が活写される。終戦直後の精神史のなかで中村の思索を追いかける視野の広さ、複雑な事象をわかりやすく伝える聰明な論述ぶりが印象的だつた。同じ美点を加藤夢三「献身する技術者」（『日本文学』二〇二一年八月）にも見いだせる。横光利一「紋章」が同時代の科学をめぐる潮流と不可分だったことを、加藤はあくまで手堅く丁寧な口調で教えてくれる。

下岡友加「虞美人草」の先へ」（『日本近代文学』二〇二〇年一月）は「台灣愛國婦人」に載つた無名の小説を解説する。この小説が夏目漱石などの小説を取り込み、再利用している様子を、丹念な検討によって浮かび上がらせる。近代文学研究の材料の範囲を押し広げて、見いだせる。横光利一「紋章」が同時代の科学をめぐる潮流と不可分だったことを、加藤はあくまで手堅く丁寧な口調で教えてくれる。下岡友加「虞美人草」の先へ」（『日本近代文学』二〇二〇年一月）は「台灣愛國婦人」に載つた無名の小説を解説する。この小説が夏目漱石などの小説を取り込み、再利用している様子を、丹念な検討によって浮かび上がる。近代文学研究の材料の範囲を押し広げて、見いだせる。横光利一「紋章」が同時代の科学をめぐる潮流と不可分だったことを、加藤はあくまで手堅く丁寧な口調で教えてくれる。

原真、「内田不知庵の文芸批評における俳諧の位置づけとその諸相」（『文芸学研究』二〇二一年三月）を書いた大貫俊彦、「尾崎士郎『人生劇場』の位相」（『関西大学文学論集』二〇二一年九月）を書いた関肇などがその例である。これらの論文は流行に左右されない分、今後も末永く読まれ続けていくだろう。

紅野謙介ほか編「戦後文学」の現在形（二〇二〇年、平凡社）は戦後文学の道筋を親切に案内してくれる。内藤千珠子はこの序文で文学史を「暴力」として切り捨てる。現在の正義からどう見えるかという尺度から過去を責め立てることは、一九九〇年代あたりからも未永く読まれ続けていくだろう。

くに西脇順三郎の詩の細部を分析したところが素晴らしい。

人だけが物語を作るのではない。結核などのような物語を作つたか。そのことを考える北川扶生子「結核がつくる物語」（岩波書店、二〇二一年）は、物語の研究を社会史に拡張できることを示す好例である。井上泰至「正岡子規」（ミネルヴァ書房、二〇二〇年）は最新の成果を交えながら、落ち着いた筆法で子規の歩みを辿つており、読み甲斐がある。一般読者向けの阿部、北川、井上の本は、文學研究の成果を社会に開いていく試みとして頼もしい。

藤井淑穎「不如歸の時代」（名古屋大学出版会、一九九〇年）を手にとつて以来、ずっとこの著者の碎けた文章の妙に尊敬の念を抱いている。最近出た藤井の「水上勉」（名古屋大学出版会、二〇二二年）の文もやはり抜群にいい（もちろん内容もいい）。近代に生きた代表的な文学研究者の歩みを考える叢書「近代「国文学」の肖像」（鎌木健一、高田祐彦たる著者、岩波書店、二〇二一年）が次々に出てきる。国学系の潮流ばかりが注目されてきた文学研究史という領域を新たな段階に導いている。

ようやく田中実の一派の記事がほぼ「日本文学」に載らなくなつた。この一派が「セクショナリズム」を禁じた綱領に背きながら、約一六〇〇人の会員の会費を使って「日本文学」を私物化し続けたことは許しがたい。この一派のせいで数十名の退会者が出了のも当然だつた。誌面改革を推し進めた運営委員たちの尽力に感謝したい。ついでに要望を申し上げれば、「日本文学」の字が小さくて読みづらいので、この際もう少し大きくしていただけたとうれしい。

1953年2月28日第3種郵便物認可 2022年3月10日発行(毎月1回10日発行)第71巻第3号

# 日本文学

3

## ディスタンス 特集・古代文学の〈距離〉と コミュニケーション

2022年 VOL. 71  
日本文学協会編集・刊行

特集・古代文学の〈距離〉と「コミュニケーション」  
ディスタンス

『古事記』における〈距離〉と「コミュニケーション」  
ディスタンス

——イザナキ・イザナミ神話を起点として——

「書かれる歌」と「詠唱される歌」との〈距離〉  
ディスタンス  
——伊勢物語「東下り」の和歌と境——

〈距離〉の文学・伊勢物語……

ディアスピラを志向する昔男  
——伊勢物語「東下り」の和歌と境——

子午線 研究倫理について思うこと……

読む 古記録を読む快樂  
テクスト——

——『小右記』長和三年三月、実資の憂鬱——

書評

阿木津英著『アララギの釋迦』……

疋田雅昭著『トランス・モダン・リテラチャ——めぐる芥川賞作家の現代小説分析』……

学界時評

骨董品化への懸念……

授業改善が求められる国語教室の危うさ……

今月号掲載の論文要旨……

3・4月部会案内……

新刊紹介……